『チリとチリリ』のストーリーについて

浜野　兼一

キーワード：絵本、児童文化、ストーリー

はじめに

絵本『チリとチリリ』は、2003年に初版が刊行された。その後、およそ10年のあいだにストーリーの場面を変えた６つのバージョンが刊行されている。初版刊行年を含めて３年連続で新しい場面（バージョン）のものが刊行されたことから、しだいにシリーズ本ととらえる傾向がみられるようにもなってきている。

この絵本の愛読者は、主人公のチリとチリリが次にどのような場面で描かれるのかを想像しながら、これまでのシリーズをくり返し読んだり、読み聞かせをしている。幼稚園や保育園、家庭などで読み聞かせを行う際には、ほかのバージョンのタイトルを紹介したり、次にチリとチリリがどこに行くのかなど、子どもの想像力を喚起する質問をすると効果的であろう。

読まれる対象として想定されるのは、就学前の女児である。この理由は、主人公が姉妹であることと、ストーリーの展開やエピソードの内容が“女児うけ”するものとなっているところにある。

本稿では、６つのシリーズのうち、唯一サブタイトルが記されていない、第１作目の『チリとチリリ』を取り上げ、ストーリーの内容の分析を試みる。

１．子どもの目線からストーリーをみる

最初のページを開くと、チリとチリリが家の外にいるという状況で互いに言葉を交わし、どこかに出かけようとしている。そのストーリーは、次のような書き出しからはじまっている。

「いいてんきね　チリ」「そうだね　チリリ」
チリとチリリが　とても　はやおきをした　あるひ

ふたりは　じてんしゃで　でかけることにしました

チリとチリリの２人が自転車に乗り森の中に入って行くところからの展開を、ストーリーの主要場面に基づいてみていくと、表１のようになる。

表１　主要場面の概観

場面	チリとチリリの状況	備考（原文抜粋）
森の中（スリートーのはじめ）	自転車に乗っている	もりのなかを　はしっていると　どこからかいいかおりが　してきました
森の喫茶店	テーブルについている	チリとチリリが　ちゅうもんしたのは どんぐりコーヒーと　れんげティーでした
もりのサンドイッチやさん	買いに来たうさぎさんとくまさんを見ている	「いつもの」（くまさんの台詞）
池のほとり、木陰	休憩したり遊んだり	いけの　ほとりで　きゅうけいです
もりのホテル	チェックイン後音楽会を楽しむ	しばらく　いくと　もりの　ホテルが ありました

次に、表１に記したストーリー展開における３つの場面（森の中、森の喫茶店、もりのサンドイッチやさん）について、特に読み聞かせをしてもらう子どもの視点や疑問という側面からみてみることにする。

ストーリーのはじめに出てくる“森の中”の場面では、好奇心とともに自転車を走らせるチリとチリリがある“香り”を感じる。ここで想定される子どもの視点は、「森の中に入っていくとなにがあるんだろう」「お話に出てくる“香り”はどんな香りだろう」であろう。読み聞かせをしてもらう子どもが自転車に乗ったことがなければ、「自転車に乗るの楽しそう」「乗ってみたい」などであろうか。

“いい香り”に誘われるように自転車を降りたチリとチリリは、“森の喫茶店”に立ち寄り、そこで“どんぐりコーヒー”と　“れんげティー”を注文する。これらは、大人の視点でみると、架空の飲み物になるが、そうであっても、子どもとともに「どんな味がするんだろう」という疑問を共有するとよいのではないだろうか。

ストーリーはさらに展開し、チリとチリリを“もりのサンドイッチやさん”へと導いていく。その場面では、４種類のサンドイッチが登場する。“はちみつパンのくわのみジャムサンド”“にんじんパンのゆずジャムサンド”“くるみパンのいちごジャムサン

ド”“きなこパンのくりジャムサンド”。これらのサンドイッチは、商品名をみても味をイメージすることが難しいことから、読み聞かせをしてもらう子どもの知的好奇心を刺激する場面になっているといえよう。

2．ストーリーの展開と台詞の位置　　分析　～台詞をめぐる考察～

本節では、『チリとチリリ』のストーリーのなかに出てくる台詞に着目し、その内容の概観、分析を試みる。表２にストーリーのなかに出てくるすべての台詞とその内容をまとめてみた。

表２　台詞の内容と回数

頁	総文字数	台詞の文字数	備　　考（台詞原文）
1	56	15	「いいてんきね　チリ」「そうだね　チリリ」
7	62	8	「おまたせしました」
8	25	2	「やあ」
13	55	6	「いらっしゃい」
14	22	4	「いつもの」
21	29	5	「こんばんは」
25	21	21	「もうすぐ　もりの　えんそうかいが　はじまりますよ」

表２に基づいて、ストーリーに出てくる台詞と登場するキャストを照らし合わせると、冒頭の「いいてんきね　チリ」「そうだね　チリリ」は、物語の始まりを告げるチリとチリリのやりとりである。台詞という点からみると、主人公であるチリとチリリのものは、この冒頭のやりとりのみとなっている。以降の台詞はすべて“動物”のものである。

まず、７頁の「おまたせしました」は、森の喫茶店に出てくる「きつねのウェイター」の台詞であり、注文をした“はちさん”に発せられたもの。「やあ」は、断定はできないものの、「はちさん」がチリとチリリに向かって言った言葉と思われる。

場面が変わって、次の「いらっしゃい」はもりのサンドイッチやさんのカウンターにいる「たぬきの店員」、「いつもの」は「くまさん」がたぬきの店員に注文をしたところである。

そのあとに出てくる「こんばんは」は、もりのホテルの「フロントのしか」で、その後チリとチリリを部屋まで案内する。そこで、「もうすぐ　もりの　えんそうかいが　はじまりますよ」と同じ「フロントのしか」がチリとチリリに伝える。

以上のように、32ページ中７回出てくる台詞の場面うち、主人公であるチリとチリリの台詞は冒頭の１回だけで、残りの６回はすべて擬人化された動物の台詞ということになる。

３．“読み聞かせ”に向けて

ところで、大人が子どもに読み聞かせをする場合、第１節の表１（主要場面の概観）で検討した“子どもの視点と疑問”にどう答えていくかという課題がある。

一般的に考えて、台詞が多ければ登場人物の関わり方や言葉のやりとりがより具体的になり、読み聞かせの受け手である子どもにも、目にした内容がそのまま直截的に伝わる可能性が高いと考えられる。

一方、チリとチリリのように、主人公でしかも双子という設定でありながら、その２人の言葉によるやりとりがほとんど書かれていない作品もある。こうした場合、チリとチリリの会話がほとんどない、という状況をどうとらえるかは、「読み手」による。会話がないことをネガティブにとらえれば、その先の発展はあまり望めないであろう。読み聞かせを行うにあたって、このような事態になることは避けたい。

では、良い方向でとらえるにはどうすればよいのか。それは、読み手の工夫と創造力、思考力の活用が鍵となる。通常、読み聞かせでは、絵本に描いてある絵と書いてある言葉を忠実に確認していくのが基本的な手続きになる。

会話がほとんど書かれていない『チリとチリリ』の場合は、読み聞かせの途中、または読み終わった後、読み手が受け手である子どもと“一緒に考えてみる”という方法がある。

では、何を考えるのか。

それは、“書かれていない台詞”である。ストーリーのなかの主人公の会話を一緒に考えることで、読み手と受け手のあいだの会話も進み、これが両者のコミュニケーションの活性化にもつながる、といえよう。

参考文献　どいかや『チリとチリリ』2003年５月１日。